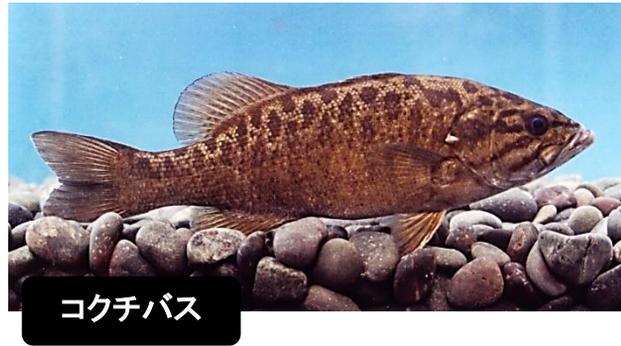


# 水産研だより



コクチバス

## 【今回の内容】

- 1 「アユの早期小型放流の有用性について」
- 2 「コクチバスがみつかりました」
- 3 「研究発表会を開催しました」

## 1 「アユの早期小型放流の有用性について」

アユの天然遡上が無いダム上流域の河川では、放流アユの数とその後の生き残りが漁獲量を左右する重要な要因となります。現在、アユに対して猛威をふるっている冷水病への対策として、県内の多くの漁業協同組合は、水温の上昇を待って、従来より大きなアユを放流しています。放流アユは重量単価で売買されますので、この放流方法では一尾あたりの単価が高まり、予算上の制約から放流できる尾数が減少してしまいます。しかし、早期にアユを多く放流しても冷水病で死んでしまえば意味がありません。「放流尾数」をとるか、「生き残り」をとるかは難しい問題です（図）。



当研究所では、冷水病菌を持たないアユ種苗を用いれば生残率が高まり、放流時期を昔のように戻せるかもしれないと考え、放流時期の再検討の試験を行いました。

県下3河川で4回にわたり標識放流試験を実施し、アユを4月中旬以前に放流した場合と現行の5月中旬以降に放流した場合とで一尾のアユを釣獲するのに必要な経費を比較したところ、すべての試験で、早期に小さなアユを放流した場合の方が現行の放流より効果的であることがわかりました。

ただし、放流サイズが小さいと解禁時の漁獲アユのサイズも小さくなるため、小さければ小さい程効果が高いわけではありません。

今後、放流日と放流サイズから解禁時のアユの大きさを予測できるアユの成長早見表を作成し、各漁業協同組合に配布したいと考えています。



図 早期小型放流と現行の放流について

(下呂支所 徳原)

## 2 「コクチバスがみつかりました」

大変残念なことに県内でコクチバスを目撃情報が続いています。コクチバスはオオクチバスに似た姿をしており、オオクチバスとコクチバスを合わせてブラックバスとしばしば呼ばれています。この2種は口の後端が目の後端を超えるか否かで見分けることができます。本種はいわゆる外来生物法で特定外来生物に指定されており、侵略的な種とされています。このため、ほかの水域への生きたままの移動等は禁止されており、罰則も存在しています。本種は冷水性が強く、遊泳力が高いため、河川上流域でも生息や繁殖が可能と考えられます。河川で繁殖してしまうと河川を通じて広範囲に分布が拡大し、それに伴いアユやマス類、その他在来魚への被害が拡大することが考えられます。このようなことが起こらないように、早い段階で駆除を行い、被害拡大を未然に防ぐことがとても重要です。

河川や湖沼などの内水面は自由に使える釣堀ではありません。多くの内水面では管理者が必ずいます。また、そのような場所で漁業を行って収入を得ている漁業者もいます。個人的都合で侵略的な外来魚の分布拡大につながる行為を行うことは、このような人たちに多大なる迷惑をかけることになり、決して正当化できる行為ではありません。漁業関係者や遊漁者の皆様にこのように水産資源や生態系に悪影響を及ぼす外来魚がいるということを知っていただき、もし、コクチバスについての情報をお持ちでしたらご連絡いただけたら幸いです。外来魚駆除は多くの人の協力を必要とします。コクチバスという魚がいることを知っていただき、分布拡大や被害拡大が起こらないよう皆様のご協力をよろしくお願いします。



左:コクチバス  
口の後端(赤)が  
目の後端(青)  
よりも前

右:オオクチバス  
口の後端(赤)が  
目の後端(青)  
よりも後ろ

(生態環境部 小松)

## 3 「研究発表会を開催しました」

3月2日に中濃総合庁舎(美濃市)で平成28年度の「研究発表会」を開催したところ、県内各地域より漁業関係者をはじめ行政職員、自然工法管理士など160名の方々にご出席いただきました。研究発表は、「生態環境」、「漁業養殖業」に区分した6課題について、それぞれの担当者から報告しました。発表内容は、「水中を漂うDNAから魚を調べる」、「長良川のアユの産卵場の分布と仔アユの降下量について」、「冷水病に強い子持ちアユ生産用種苗の開発」、「アユの鮮度保持技術の開発」などでした。

発表後の質疑応答では、参加者の方からご質問やご意見を多数いただき、大変有意義な発表会となりました。誠にありがとうございました。  
(担当:漁業研修部 松田、下呂支所 原)



満席状態の会場です



発表の様子です